The Japanese Geotechnical Society

総　説

第33回地盤工学研究発表会（山口大会）を終えて

渡　部　義　信（わたなべ　よしのぶ）
第33回地盤工学研究発表会実行委員長，建設省中国地方建設局長

平成7年1月の阪神淡路大震災以降，平成8年12月の蒲原沢土石流災害，昨年7月の針原川土石流災害，そして8月の第2白糸トンネル岩盤斜面崩落といった大規模な自然災害が後を経たず，地盤工学への社会の関心がより一層高まっています。このような状況の中で第33回地盤工学研究発表会（山口大会）が，平成10年7月14日から16日までの3日間，“西の京”と呼ばれる山口市の山口大学吉田キャンパスを主会場として開催されました。大会の初日は晴天に恵まれましたが，2日目からはあいにくの雨模様の天候となり参加者の動向が大変気掛かりでした。結果的には3日間で2 323名もの参加者があり，また，研究発表論文数も全体で1 259編と大変盛況な研究発表会となりました。

大会を振り返って見ますと，学術面では阪神大震災後，改めて注目されている地盤の液状化や側方流動，耐震といった動的問題に関する研究発表が多く，その数が約200件に達したことが特徴であったと思われます。また，連日各研究発表会場はいずれも満席に近い盛況振りで，特に大会の中日に行われた日下部・浅岡・関口教授による「展望」は，終始満席の状態が続くなど参加者の関心の高さを物語っていました。

企画面での特徴は，民間企業の新しい技術情報や中国地方の社会資本整備の状況を紹介する「技術展示コーナー」を設けたことです。出展を募集したところ57社63ブースの出展応募があり，規模の大きい技術展示となりました。また，従来行われていた現地見学会を取り止め，その替わりに「技術展示コーナー」において21世紀未来博覧会のPRや松下村塾，錦帯橋といった山口県を代表する歴史・文化施設をパネル展示により紹介し，「技術」の中に地域の特色を活かした潤いの場を確保しました。

また，地盤工学への社会の関心が高まる中で，市民と地盤工学会との接点を確保するため，特別講演会を無料一般公開としました。特別講演会には「フィールズ賞」を受賞された数学の世界的権威である広中平祐山口大学学長をお迎えし，「厳密と曖昧」と題する御講演を賜りました。降りしきる雨にもかかわらず参加者の1割強の市民の方が会場へ足を運ばれました。より多くの市民の方々と地盤工学会が触れ合えるような大会の企画を立案して行くことが今後とも大変重要であると思います。

特別講演会（広中山口大学学長）

一方，中国支部が研究発表会の準備および運営全般を担当するのは，平成2年の岡山大会以来8年振りのことで，山口では初めての開催となりました。中国支部では，大会のほぼ1年前にあたる平成9年4月に山口大学を中心とする関係機関の協力のもとに，実行委員会を組織し，大会の準備を進めて来ました。準備の過程で特に苦慮した点は，研究発表会が盛夏での開催となるため参加者への快適な環境を提供したいとの思いからすべての研究発表会場に冷房設備を設置したこと，宿泊施設が会場周辺に分散することから宿泊施設と研究発表会会場間を迅速かつ円滑に移動可能なシャトルバスを運行した点があげられます。このように山口大会特有のいわば運営面での“アキレス腱”を克服することができた背景には，大会の準備および運営の大部分を実行委員として関係機関の多数のボランティアによって支えていただいたこと，実行委員一人一人が最後までホスピタリティーを持ち続けたことが見逃せません。

末尾となりましたが，第33回地盤工学研究発表会のために，多くの新しい企画とその実施に御尽力をいただいた木村会長をはじめ，学会調査部の皆様，会場施設の提供はもとより大会の準備および運営に多大な御協力・支援をいただいた山口大学をはじめとする実行委員各位に対して心から謝意を表明させていただきます。

（原稿受理　1998.8.17）

NII-Electronic Library Service